《第9回パネルの会 開催報告》

開催日　平成 20 年９月７日（日
会　場　ホテル華の湯（磐梯熱海温泉）
テーマ　「薬について知ろう！！」

福島県内で心の病を治そうとしている人たちと彼らを支える人たち。皆が集まって、最新医学や精神科医療を勉強し発展させる目的で開催されるパネルの会。

今年は９月７日（日）午後１時 10 分より、磐梯熱海温泉、ホテル華の湯で開催されました。今年のパネルの会は、「第 16 回研修交流会、精神保健ばんだいのつどい」のなかの公開講座として開かれました。今年の参加者は 125 名。リピーターの方々も多く、パネルの会が少しずつ皆さんに浸透してきたことを実感しました。

今年のテーマは「薬について知ろう!!」。今回このテーマに決定したのは、昨年度のパネルの会終了後「次回はぜひ薬の話が聞きたい」との要望が多数出たからです。

パネリストは薬剤師で帝京大学薬学部准教授 齋藤百枝美先生、精神科医で福島県立医大神経精神医学講座助教 和田明先生、当事者から福西節子さんと大嶺清治さんが参加してくださいました。

齋藤先生は薬剤師の立場から､「自分の与えられた選択肢の中から、自分の望む治療を選択し、服薬治療への主体的参加」を呼びかけました。そして、薬の服薬自己管理モジュールの大切さをお話され、飲み忘れ防止対策の服薬カレンダーや小分けタッパーなどを実際に持参し、展示してくださいました。

和田先生は、統合失調症と薬物療法の話しから、「治療全体を家に例えると、薬は土台、リハビリは骨組み、土台がしっかりしていないと家は傾いてしまう」と説明くださいました。できるだけ納得して服薬を続けることを推奨していました。

お二人とも、アドヒアランスの重要性、つまり当事者の方が医療従事者から十分な説明を受けたうえで、自分の望む治療を医療関係者と協力して選択し、服薬なども自ら積極的に行うこと・自分に合った薬を選ぶ

ことを推進していました。

続いて、当事者である福西さんは、薬を飲んで自分が前向きになったこと、大嶺さんからは薬を止めたときの体験からいかに薬を飲むことが大切かを発表してもらいました。お二人の貴重な体験談は、会場の方々から共感を呼ぶとともに、非常に勇気付けられたなどの感想をいただきました。

また、今年度は多くの質問に答えられるよう質問用紙を事前に配布し、パネルの会開催中、常時それらを回収する体制をとりました。そしてパネリストの発表後、その質問をもとにパネルディスカッションを行いました。座長であるパネルの会 会長丹羽真一教授が司会をつとめ、質問事項を丁寧に拾い上げていき、活気のあるディスカッションとなりました。しかし、残念なことに時間の都合上、皆さんの熱意には総て答えきれず、会長は「皆さんからの質問は、後日必ずお答えします」と約束をしていました。

パネルの会終了後、薬を飲み続けること、自分に合った薬を選ぶこと、そして自ら進んで服薬することの重要性を理解したなどの感想が多く上げられました。

会場を後にする皆さんの後姿にすがすがしさを感じると同時に「来年は、もっともっとパワーアップしたパネルの会を開催しますね」と、つぶやく自分がおりました。

ご参加くださいました皆さま、ご講演くださいました皆様、そしてご協力くださいました皆々様、本当にありがとうございました。来年もまたお会いましょう。

【追　記】

なお、今年度のパネルの会は「平成 20 年度公益信託うつくしま基金助成事業」として開催さたことをご報告致します。

パネルの会に関しての詳しい資料をお求めの方は<u>ＮＰＯ法人精神疾患死後脳・ＤＮＡバンク運営委員会事務局</u>までご連絡ください。